

第1回生きものフォーラム開催結果の概要

日時 平成27年2月14日(土)
13:30~16:30

会場 市民会館おおみや 第3集会室

主催 NPO法人

いろいろ生きものネット埼玉

協力 公益財団法人サイサン環境保全
基金の助成を受けて開催

参加者数 70名



◆挨拶 脇坂純一 NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉 代表理事

◆記念講演 「シカと日本人、保護と管理をめぐる過去と現在」
三浦慎悟 早稲田大学人間科学学術院 教授

・所沢の早稲田のキャンパスでもナメクジは皆イタリア産のものになっています。外来種は知らない間に広がっています。今後は外来種問題にもっと密着していく必要があると思います。

・本日はシカの話です。日本人とシカとの関係は、各地に伝わるシシ踊りに見ることができます。シシとはイノシシとシカ、さらには熊とも見ることができます。その関係は縄文時代に遡ります。これらの動物は食べ物だけでなく、衣類や道具を供給する貴重なものでした。



・今、シカの食害が広がっています。キャベツやカボチャなどの農業被害ばかりでなく、スギ、ヒノキなどの葉っぱ、幹など木本に広がっています。若齢の木ばかりでなく、40~50年経った木がやられてしまい、お金にならない。トウヒやハルニエなどの貴重な木もやられてしまいます。

・シカは何故危険なのでしょう。①食べるメニューが多い。カモシカは300種、シカは1,000以上食べる。②群れで生活する。みんなで食べるということである。つまり、食べるインパクトが大きく、生態系への影響が大きいのです。

- ・食べない（例えばイトザサ）ものだけが残るということになる場合もあります。こうした結果、土壌流失に至る場合もあり、森林生態系が崩壊していくのです。

- ・なぜ、シカが増えるのか。温暖化の影響で暖冬が増えている。異常に寒い時が減少している。シカは4~5月に子供を産みますが、その最初の冬が乗り越えられるかが重要です。これまでは10年に1回くらいは異常低温で、4~5割は死んでしまいました。1984年の金華山での大量死は当時話題になりました。

- ・ハンターの減少も大きな原因です。ヨーロッパやアメリカでも気候の影響は同じです。アメリカはハンターの数が多く、ハンターがかなり採っています。しかし、ヨーロッパでは日本とほぼ同じように増えています。

- ・耕作放棄地の面積が増えたことも影響しています。シカイ、イノシシの生息地になってしまっています。今後、過疎化が進めばさらに拡大するでしょう。

- ・対策としては、ハリガネフェンス、電気柵があります。木本ではプラスチックプロテクターやネットを使っています。

- ・しかし、1978年から2003年までシカの数に1.74倍になっています。低山帯や里山に広がっています。

シカ数は2m×5mの10m²のなかの糞の数を数えるとわかります。成人シカは1日1,000粒の糞をするので、その残り具合を見る。そこに発見率を掛けます。

- ・江戸時代から人々は対策をとっていました。シカ垣と呼ばれるものが関西を中心に残っています。また、埼玉の三峰神社はシカ、イノシシから人々を守る信仰がありますが、寄進者の郵便番号から調べたところ、広く関東一円に及んでいることがわかりました。

- ・現在のシカの分布を見ると、北海道を含め全国に広がっています。しかし、東北は空白地帯となっている。これは何故でしょうか。岩手県の古い文献を調べてみると江戸時代には、たくさんのシカがいました。それを当時の殿様が大規模なシカ狩りを行い、一度に2,000頭を超えるシカを捕った。シカの毛皮は高く売れたため、一種の産業として実施され、ついにシカが絶滅したと考えられます。

- ・現在、シカが増えていろいろな被害が出ているのは、シカに対する人間の圧力が弱くな

ったからです。

・現代社会はシカを利用して、被害を抑えるという新たなシカの管理規定を検討する必要があると思います。

◆基調講演 「外来種のとらえ方」

牧野彰吾 NPO法人 絶滅危惧植物種調査団 代表理事

・在来種であるドクウツギについて考えてみます。50年位前は武甲山の麓などで多く見られましたが、今は減ってしまいました。埼玉県絶滅危惧IB類になっています。ドクウツギは毒があるため駆除されてしまった可能性があります。もし、ドクウツギが外来種であったら考え方は変わるのでしょうか。



・史前帰化種というのがあります。これは稲や麦とともにグループでやってきました。イネは揚子江起源で BC 3～AD 3 に伝来、それと共にやってきた随伴種にはオヒシバ、チガヤ、ヨモギなどがあり、イネと共生しています。

・麦は AD 3～5 に伝来し、随伴種にはナズナ、オオバコなどがあります。イネ、コムギ、オオムギは意図的外来種、その随伴種は非意図的外来種であり、史前帰化種と呼ばれます。

・田畑は人工的な自然であり、それを作ったから随伴種は生育した。史前帰化種はもう在来種とみなしていいのではないのでしょうか。

・セイタカアワダチソウは萩のかわりの切り花用として導入されました。天敵がなく、アレロパシーで他の植物の成長を阻害し、根が深く伸びるため土壌中の肥料を優先的に使い繁殖域を広げました。しかし、アブラムシなどの天敵が出現し、アレロパシーで自己中毒を起こし、土壌の肥料も使い果たしたので、今は生態系の一員に収まりつつあります。その分、他を排除したということです。

・外来種とは一般に明治以降に外来したものを指しますが、自然の（管理されていない）状態で生活史を確立したら帰化種と呼べるのではないのでしょうか。

・在来と外来を区別するとしても課題があります。区別が難しいということです。ブナ（日本海側と太平洋側）、コマツナギ（在来）とキダチコマツナギ（緑化導入）は小さいか大きいだけの違いです。その他に、トマト（路地栽培と木；育て方いかんによって植物は変身する。）、アメリカオオアケキクサ（外来2細胞）とニシノオオアカウキクサ（外来1細胞）、フジバカマ（在来と園芸）などがあります。

・外来種を悪いものと決めつけるのはどうでしょうか。なぜ、優位になっていくかといえ、それが生育しやすいニッチ（生態的地位）があるからです。ニッチがなければ発芽しない。発芽したとしても一回限りで生活史が循環しないのです。

・外来種にニッチを提供しているのは人間であり、外来種が悪い訳ではないのです。

◆外来植物アンケート結果報告

嶋田智英 NPO 法人 いろいろ生きものネット埼玉 理事

・外来植物問題は埼玉県がかかえる生物多様性に関する主要な問題の一つです。対策そのものの実施がたいへんであると同時に、何が外来種か、どこに線を引いたらいいかわからないという点でもたいへんです。



・県内でも環境保全団体のみなさんが地域で様々な取組を実施していますが、その実態は十分に把握されているとは言えないし、情報の共有も十分ではありません。そこで今回、アンケートを実施しました。その結果、22 団体から回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。

・活動場所で問題となっている外来種は 45 種回答いただきました。そのうち、セイタカアワダチソウ、オオブタクサ、アレチウリ、セイバンモロコシ、セイヨウタンポポ、ネズミムギ、ハルジオオンの順で回答が多く、これら 7 種で全体の半分を占めました。

・外来植物の侵入時期は 11 年以上前から多く、不明というのも、わからない位前からということでしょうか、これを加えると 67%になります。影響としては、やはり在来種への影響です。

・近年の増減状況は、「多少増えた」と「とても増えた」を足すと7割近くなります。特に増えているのは、オオブタクサ、セイタカアワダチソウ、セイバンモロコシです。

・外来種に対する有効な対策としては、地道に人手で抜いていくことですが、外来種は量が多く、課題としては人手不足、人材難が挙げられています。

・希少種についても回答いただきましたが、活動場所に分布しているものではキンランが最も多かったです。

・今回の調査の結果、何となく感じていたことや、想像とは異なるケースがあることが分かりました。

・問題点として、人材不足、連携不足が明らかになったことで、改善すべき点も明確になりました。改善策としては、環境NPO、市民、企業、行政をネットワークし、協力、連携を図っていくことであると考えられます。

◆生物多様性保全活動報告

1 河川敷の外来植物駆除活動

天田 眞 NPO法人 エコシティ志木 代表理事

・エコシティ志木は志木市で柳瀬川と新河岸川の河川敷で活動をしています。柳瀬川については1998年から現在まで活動を実施しています。従来、河川管理者の県が年2回高水敷の草刈を行っていましたが、生き物の住処を確保するため、低水路沿い2～4m位、刈り残すようにしてもらいました。その結果、そこにオオブタクサなどの外来種が繁茂するようになりました。



・そこで、外来種の抜き取りを行うようになり、99年からは中学生、住民にも参加してもらいようにして徐々にオオブタクサ抜き取り作戦が拡大していきました。やがて、アレチウリが目立ってきたので外来種駆除作戦と名をかえ、作業回数を増やすなどしましたが、アレチウリの完全駆除は困難です。その他のセイバンモロコシなどの外来種も出てきており、その対応に苦慮しています。

・2010年、市制40周年記念事業としての市民提案事業で外来植物啓発対策が取り上げられ、外来種の抜き取り体験をする「水辺のお助け隊」事業を実施しました。その際に18ページにわたる啓発パンフレットも作成しました。

・水辺のお助け隊は、翌年からエコシティ志木が主催して実施し、パンフレットも県のNPO基金の助成を受けて発行しました。さらに、外来種の生態や都市河川の現状を学ぶ水辺応援団養成講座を2013年から開始し、県のみどり自然課の助成も受けています。

・2013年からは毎年冬に一定の工区毎に高水敷に堆積した土砂を70cmほど掘削除去してもらっています。これより、オオブタクサなどのシードバンク、セイバンモロコシの地下茎も除去されますが、ヨシやオギの在来種も除去されてしまいます。

・2014年から新河岸川・柳瀬川合流点でカヤネズミ原っぱ環境応援作戦として外来種の抜き取りいや親子向けの啓発イベントを実施しています。

・このように、行政とも連携しながら、子供たちや市民を巻き込んで外来種対策を続けています。

2 外来種対策について

菅間宏子 NPO法人 荒川の自然を守る会 代表理事

・三つ又沼ビオトープは、荒川と入間川が合流する所にあり、豊かな自然が広がっています。当会は1998年から、ひたすら外来種の抜き取りを行うなど、その保全に取り組んでいます。

・それは子供たち自然を楽しんでもらいたいからであり、自然はディズニーランドより楽しいことを実感してほしいからです。そんな場所を残していきたいからです。



・活動は理屈より行動であると考え、手探りでやってきましたが、徐々に学問的な裏付けもしてもらっています。ここには生態系ピラミッドが形成されている首都圏の大草原です。

・花ダイコンは見た目には美しいのですが、ここでは困ります。外来種や栽培種が日本の

在来野草の生息地を奪っています。在来野草の保護のために、私たちは手作業で外来種などを抜き取っています。私たちの活動は日本らしい自然を守り残す活動です。

・河川敷を管理している国交省にも、いろいろ注文を付けています。三つ又沼ビオトープには毎年、毎年新しい外来種が侵入してくるのです。

・今は、4月はナノハナ、9月はオオブタクサ、春から秋にかけてはセイバンモロコシがすごい。除去作用には、やはり担い手が足りません。

・日本人の感性が変わってきているように感じます。目立つもの、派手なもの、大量の同じもの、そういうものに美を感じるようになってきているのではないのでしょうか。それにより、日本の情景が変わってしまう。それはとても悲しいことです。

3 特定外来生物オオフサモ除去作業報告

岡安玲子 NPO 法人 いろいろ生きものネット埼玉

・本日は当会が取り組んでいる活動の一つである外来植物の除去についてご報告します。

・まずは、きっかけです。昨年夏頃、県のみどり自然課に上尾市と伊奈町の境あたりを流れる原市沼川に特定外来生物の水草であるオオフサモが繁茂しているがなんとか出来ないかという住民の方からの通報がありました。



・みどり自然課では対策を実施する予算もないし、手間もないということで、河川管理の窓口である水辺再生課に話をもっていったそうです。しかし、流れを阻害し河川管理上問題が生じるようであれば、事業の優先度などから考えて対策の実施は難しいという話になったようで、縦割り行政の壁が立ちはだかった結果となったようです。

・しかし、下流部には県・準絶滅危惧種であるコウホネもあり、放置しておけない。そこで、みどり自然課は生物多様性保全を目指す当団体に協力を依頼しました。

・当団体としては、行政と民間の繋ぎ役を担うという設立趣旨にも合致することから、これを引き受けることとにしました。

・引き受けたからには経験も知見もないが、なんとかしなければ、まずは、現状把握、モニタリング、目算、腹積もりなど準備を進めていきました。

・地元の関係団体に協力依頼の声を掛けたり、川の応援団にも入り行政から機材の貸与などの支援も受けることにしました。行政も NPO にバトンを渡し気楽になったのか、支援に動き出しました。

・11月に除去作業を試行として、泥つきのオオフサモ 30 袋を除去しました。胴長を履き、ドロドロになりながらの難作業でした。

・1月25日（日）にいよいよ第1回目の除去作業を実施しました。当日は地元4団体から9名、行政から3名の方が参加してくれました。作業は水辺、水中での除去作業と陸上での乾燥作業の2班に分かれて実施しました。

・活動の広がりを目指して記者発表も行い、実際、読売新聞の記者の方が取材にこられ、活動の様子は新聞に掲載されました。

・この活動の結果、5つのコロニー、約 25 m³のオオフサモを除去し、占用許可を得た土手に作った乾燥床に運び込みました。これは、地元団体の協力、行政との連携を得て計画し、成し遂げた成功体験となりました。

・オオフサモの生命力、繁茂力には油断できませんが、除去作業は一定の成果が得られました。今後もモニタリングを続けながら、連携、協力のネットワークを維持、拡大しながら、地道に除去活動を行っていきたいと思います。

◆フロアディスカッション

コーディネーター 小峯 昇 NPO 法人 自然観察指導員埼玉 代表理事

○ NPO ですが、活動のスタート時は人が集まるのですが、だんだんに減っていく。担い手をどう育てるべきか。また、他団体とのネットワークはどう作ったらいいのでしょうか。

・2006年2011年まで野草サミットを実施しました。ぜひ復活させて欲しいと思います。



△ 無理に人を増やすことはないと思います。気張らず、焦らず、気長にやればいい。NPOでは人間の多様性も大事です。お互いが得意な部分で支え合えます。しかし、会員の高齢化は問題です。当会では国の市民サポーターの仕組みを活用して、企画運営に企業や若者を入れる取組もしています。

・当会は国の河川事務所とも連携しています。国もただ文句を言っているだけでは話を聞いてくれません。自分たちが活動することで初めて話を聞いてくれるようになります。

・NPOを18年間もやっていると途中で中だるみもあります。活動と共に人材養成を進め

・ネットワークを広げるうえで、野草サミットはたいへん興味深い取組です。検討していきたいと思います。

・斜面林の保全をしているNPOです。当会では食べ物を持ち寄って収穫祭などの行事を行っています。やはり会員の懇親ができるようにすることが大事です。

○ 外来植物対策でもニセアカシアのような木本はなかなか対策が進んでいないように思いますが。

△ 河川敷での自然観察や保全活動をしています。ハンノキを保全していますが、年齢的限界にきているものや乾燥化などの影響で衰えるものがあります。外来植物対策としてはオオブタクサの除去活動を行っています。外来の木本ではトウカエデが問題です。小さなものはノコギリで切れますが、大きなものは私たちでは難しいので、河川事務所に頼んで切ってもらうこともしています。

○ 河川の調節池の保全活動をしています。ネズミムギやホソムギは5月頃に刈り取ってしまうのが効果的だと思うのですが、行政の草刈は6月と10月の年2回です。なんとか5月に草刈をしてもらうようにできないものでしょうか。

・サイサン保全基金の助成金のようなものなら、4月からでも使えるのでしょうか。

△ 行政は2～3年で人が代わってしまうため、なかなか年度初めに事業に取り掛かれないという実態があります。

・私たちのところでは、行政に言い続けたところ、5月に草刈が間に合ったところが一部あります。

・サイサン保全基金は活用した活動は4月からでも実施可能です。地道な活動を応援しています。

○ 山の保全の問題として、埼玉、山梨、長野でシカをやりとりするなどして、なんとかシカの肉を利用することはできないでしょうか。

△ 捨てるようなら食べた方がいいと思います。例えば学校給食に利用するというのも一つの方法です。

・埼玉でも利用に向けて動き出したところですが、残念ながら放射性物質の問題が出てしまいました。

○ セイバンモロコシは抜いても抜いても、また出てきてしまうのですが、どうしたらいいでしょうか。

△ 残念ながら決定打はありません。茎を抜いても地下茎から伸びてしまいます。耕してしまうというのは一つの方法です。ただし、耕して攪乱させると、他の種類のものが出てきますので、それを毎年繰り返します。